参考1

第１回農業分科会の主な意見

	主な意見要旨
農業従事者 ・担い手	・農家との連携や経営継承をどうしていくのか。農地についても、農家の子に経営継承させるのか、新規参入者に渡すのか、集落営農みたいにするのか。**経営継承についても考える必要がある** ・新規就農者は、農業と関係ない方が希望を持って入ってこられる。**農業で食べていけるのかというのが一番重要な問題である** ・**新規就農したが、定着しないという問題がある**。**農業を始めた人が続けていけるような研修やマッチングなどの施策をしっかりしてほしい** ・後継者をどう育てるか、次にどう繋げるか。花き農協では、後継者ではなく、経営者を育てる取り組みをしている ・行政が後継者を集めて、集中的に特訓・教育をすることはできる 生産者と消費者団体を繋いでいくことやスマート農業、有機農業のことなどについて若者を育成する組織を作ってもらう等、特徴ある政策があればいい ・収入が少ないと農業をしようという人が少なくなる 農業も一生懸命頑張れば魅力あるものであるということを、農業者自らＰＲしていくことや「農業、かっこいいな」と思ってもらえる若手農業者が増えれば、農業は継続していくと思う
農への理解	・**農業者の「農業の魅力」発信が必要**ではないか ・福岡市では、一人一花運動など**行政からの働きかけが強い部分がある** ・若手農業者は仲間を募り、同じような農業を目指す仲間づくりをしながら頑張っているので、生産者の方々を前面に出しながら農業の魅力を伝えていくのも一つの方法と思う
農業施策	・行政から助成・補助を受ける場合、属人・属地というのがある。また、補助や助成を求める場合は、農振地域が中心となる。広い枠で農家に対する補助・助成が行ってほしい ・**ＩｏＴやＡＩとは全部ツールである**。**それを入れたから、農業がよくなるわけではない。売る場所、売るための時間を作るために導入が必要である** ・ＩｏＴやＡＩの情報を活用し、施設園芸はこのぐらい儲かる、トマトはそろそろいっぱいだけど、苺だったらまだいける。といったようなところが見えてくるのではないか ・大規模な農家であれば、ドローンなどのＩｏTは当たり前になってきている。糸島では、自動走行トラクターを入れる方向で動いている。ものというのは、どんどん変わっていく ・**ドローンの活用がなされているが、60歳以上の方が今からドローンは難しい**。先端技術を使わなくてはいけないので、若い人、工学的な知識がある人、興味がある人に限られてくる **年配の方は今までの経験を活かしたようなやり方、年代別だったり、農業者の特性に合わせて、指導やフォローをきめ細かにやっていくことが重要** ・趣味で農業をやりたい都市住民がいると思うが、農地は道路が狭い、駐車場がないというような問題がある 農地を駐車場にできるというような新しい方法も考えることができれば、農地を活用されていくのではないか ・農家の意識調査で「6次産業化の推進」や「IoTの活用」を今後取り組みたいとの意見が少ない。（**農業者へ情報が周知できていないと思われる**）
農地・農家 のあり方	・**福岡市は98％が家族農業、小規模での農業が中心となっている。農家の土地も、それぞれの家族の財産として、田や畑がある** これをいきなり集約化するという方向には考えづらい。**小規模の家族農業が大多数、そういった像を考えていかなければならない** ・農業をやめた土地については、専業農家の方が引き受けて、農業をしてもらっている。しかし、ＪＡにも委託できない、農家にも委託できない農地もある。そういう農地をどうしたらいいか ・趣味で畑を作ってくれる農地もいくつかある。その方たちが農業をしなくなったとき、この土地を売ることも、家を建てることもできない。先々どうしたらいいのか ・福岡市には、**市外の若手農業者が**自分の許容範囲に合わせて、**生産者がいない農地を集めて、生産しているところもあるが、地域との関わりが持てていない** そういう農業者に、例えば、市は補助金を出し、その代わりにこの地域のコミュニティに入ることを条件とし、その地域の農業者と連携を取ることで、土地がきちんと管理されると思う
SDGｓ	・ＳＤＧｓの取組みと併せて、**農林水産省が発出した「みどりの食料システム戦略」も取り入れてほしい**。**農地は緑の景観であり、自然災害などの万が一の時に、ある意味、農地が避難所になる** ・農林水産省が2050年に向けて、有機農業の面積を今の４０倍の100ヘクタールにしたい。農薬の使用量を半減し、化学肥料の使用量を30％削減するという方向性を打ち出している 有機農業をやるのであれば、1件ずつやっていても、農薬が飛んできたりしてよくない。例えば、耕作放棄地が進んでいる中山間地域の団地化したようなところを上手く利用できないか
都市農業	・**福岡市は人口160万人の都市なので、都市農業ということを踏まえ、都市農業の在り方を考える必要がある**。市民がしっかり消費をすれば、生産者の所得向上につながると思う ・**福岡市の農業の強みは、商業圏の中にいる生産者であるということ**。**商業圏が近い、消費者の意見が聞けるという、恵まれた環境である** そういうところから、とんがった農産物を作っていくのも１つの手かなと思う 博多宝玉など、生産者が農産物に対して誇りを持っていけるようなものの開発や販路の拡大ができた。福岡市で輝いている農業者のアピールをしていいと思う
農産物の生産・ 流通・消費拡大	・**福岡市は「生産者」より「消費者」が圧倒的に多く、生産を増やしていくことが必要**（市内産の供給率が４％） ・農畜産物の安定的な供給の確保、食の安全と食育の推進について、福岡市の農産物は福岡県のふくおかエコ農産物の認証をもらっているものが少ない。少ないのは、減農薬であるため、収量が少ない ・品質をあげようとすると、収量は必ず落ちる。品質と量を一緒にあげようというのは難しい。それを考えると上位何％はいいものを作り別ブランド化していくのもいい。外国でもされていること ・**福岡市の学校給食は地産地消を推進している**。しかし、学校給食で一番食べられる品目は、タマネギ・バレイショ・ニンジンであり、福岡市では難しい 学校給食でさらに地産地消を推進するならば、圃場に助成、補助をして、福岡市内産の野菜を作り、食べさせるといい ・**食育をするとき、子どもの声が一番重要である**。**農産物の１年間の四季折々もリストアップをし、小学校の子どもたち全員に、学校給食でその季節のものを食べさせ、** **マスコミなどで情報発信をすると保護者にも影響があると思う** ・市場で農産物が競合する中で、**福岡市内産のものにこだわり、高くても福岡市の野菜・果物を食べる、買っていただく方法はないか**。安全・安心で新鮮で安い農産物が一番いい **福岡市内産の農作物の出荷先・販売先を区分けしていくなど、対策が必要**。価格だけだと、どこの農産物でも一緒だということになってしまう ・販売する場の多様化が重要になっている。量販店だけでなく、マルシェみたいなものを含め、いろんなものがある ・**現在有機JASは高くて売れない**。それを買う消費者は限定されている。一般の野菜で十分という人が多い。**福岡市でするのであれば、販路先までを見据えて生産していかないといけない** ・国が農産物の輸出を取り組んでいる。海外で日本の野菜を売り込み、高く売ることで生産者の所得に直結する。福岡市にはベジフルスタジアムがあるので、海外に売り込むこともしっかりやってほしい ・**福岡市でしているもの、福岡市でないとできないものなどを情報発信することで、若い人たちの意識も変わってくると思う**